



第63回 日本生殖医学会九州支部会

会 長

宇津宮 隆史

セント・ルカ産婦人科 セント・ルカ生殖医療研究所

● 第63回 日本生殖医学会九州支部会 ●

日 時：平成18年4月9日(日) 9:00～16:32

評 議 員 会 9:00～ 9:20

総 会 9:20～ 9:30

一般学術講演会 9:30～12:46

13:30～16:32

会 場：**エルガーラホール 7階中ホール**

福岡市中央区天神1-4-2

TEL (092)711-5017

会 長 宇津宮 隆史

(セント・ルカ産婦人科 セント・ルカ生殖医療研究所)

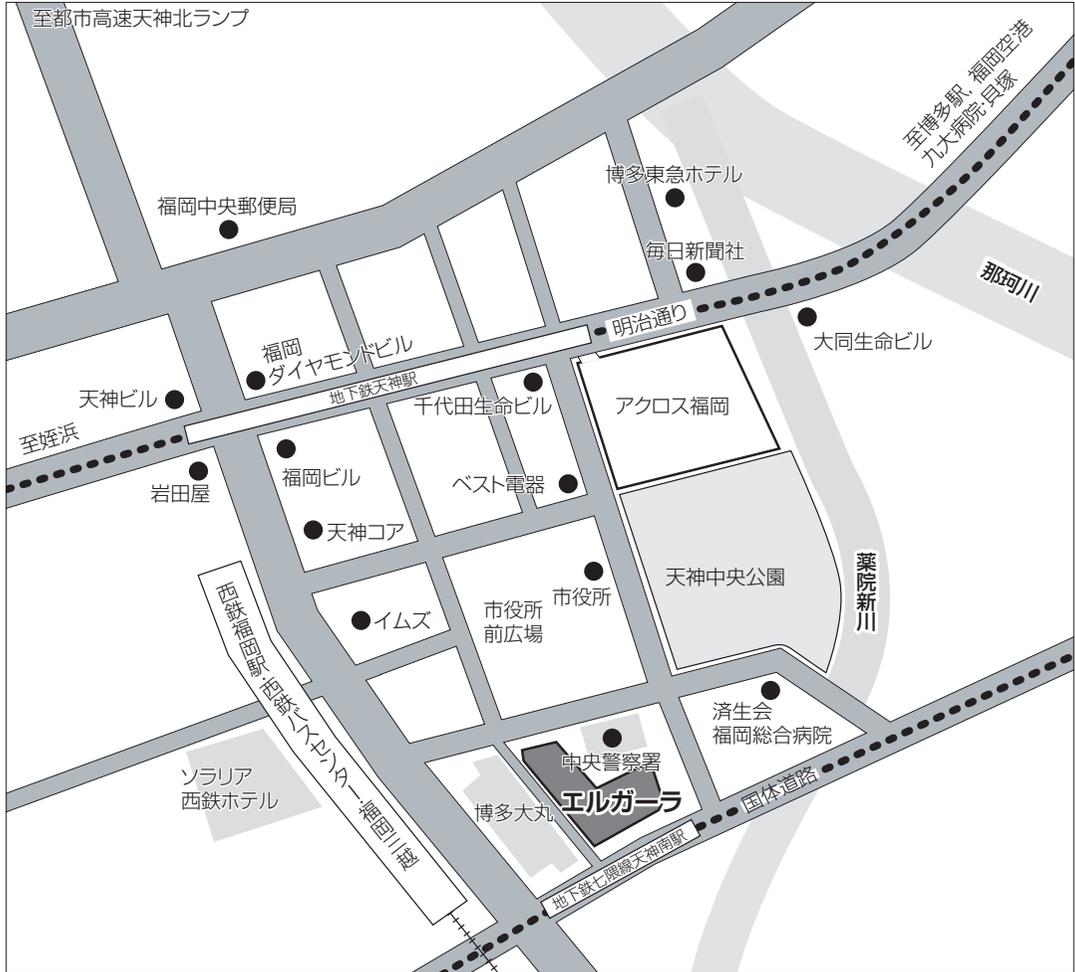
〒870-0967 大分県大分市津守富岡5組

TEL 097-568-6060

FAX 097-568-6299

- 注1. 参加費 3,000円
2. 発表時間は発表5分・討論2分です。時間厳守でお願いします。
 3. 発表はPCパソコンによる発表のみとさせていただきます。必ずパソコンをお持ち下さい。
 4. 学会当日はこのプログラムを必ず持参してください。
 5. 質問がある方は予め質問マイクの近くに待機しておいてください。

会場案内および会場図



- | | | | |
|-------------|--------|-----------|-----------|
| ●地下鉄天神駅より | 徒歩 5 分 | ●JR 博多駅より | タクシー 10 分 |
| ●西鉄福岡駅より | 徒歩 3 分 | ●福岡空港より | タクシー 20 分 |
| ●西鉄バスセンターより | 徒歩 3 分 | | |

PROGRAM

開会の挨拶 9:30 会長 セント・ルカ産婦人科 セント・ルカ生殖医療研究所 宇津宮隆史

第1群 [心理I 治療と意識] 9:30～9:58

座長 セント・ルカ産婦人科 上野 桂子

1 遠赤外線治療患者の意識・治療効果調査

竹内レディースクリニック附設不妊センター

○立石こずえ、小田原桂子、永井由美子、釘宮まりこ、
遊木 靖人、福元由美子、竹内 美穂、竹内 一浩

2 不妊症患者における腹腔鏡検査前後の心理

セント・ルカ産婦人科

○河野 絢子、斉高 美穂、柴田 令子、指山実千代、
上野 桂子、宇津宮隆史

3 女性不妊症患者と男性不妊症患者の非配偶者間生殖補助医療に対する意識の比較

セント・ルカ産婦人科

○恵良 郁絵、関 こずえ、松元恵利子、原井 淳子、
工藤 由香、柴田 令子、指山実千代、上野 桂子、
宇津宮隆史

4 不妊治療で妊娠に至った患者への質問紙調査

—男性因子の夫を持つ妻の気持ちについて—

セント・ルカ産婦人科

○赤嶺 佳枝、松元恵利子、指山実千代、上野 桂子、
宇津宮隆史

第2群 [心理Ⅱ 困難例、経済] 9:58～10:26

座長 蔵本ウイメンズクリニック 蔵本 武志

5 治療を休む事への抵抗感が強い女性不妊患者への臨床心理士による支援

蔵本ウイメンズクリニック ○伊藤 弥生、福田貴美子、蔵本 武志

6 40歳以上の不妊症患者を対象としたサポート・グループの取り組み ーグループプロセスと有用性についてー

セント・ルカ産婦人科 ○上野 桂子、二宮 睦、松元恵利子、門屋 英子、
原井 淳子、指山実千代、宇津宮隆史

7 不妊治療終結に対する患者の意識調査

セント・ルカ産婦人科 ○門屋 英子、二宮 睦、松元恵利子、篠田多加子、
原井 淳子、指山実千代、上野 桂子、宇津宮隆史

8 不妊治療費助成金制度に関する意識調査

竹内レディースクリニック附設不妊センター

○小田原佳子、永井由美子、立石こずえ、釘宮まりこ、
遊木 靖人、福元由美子、竹内 美穂、竹内 一浩

第3群 [その他I 管理、基礎] 10:26~11:08

座長 大分大学 河野 康志

9 漢方療法は原因不明の女性不妊に有効か？

鹿児島大学病院女性診療センター

○沖 利通、新谷 光央、井元有紀子、河村 俊彦、
儀保 晶子、新塘 奈央、時任 ゆり、貴島 佳子、
宇都 博文、中江 光博、山崎 英樹、堂地 勉

10 肥満に対する食事および運動療法の効果について

セントマザー産婦人科医院 ○宮本 知佳、田中 温、永吉 基、粟田松一郎、
姫野 憲雄、田中威づみ

11 産婦人科における性同一性障害患者の管理について

長崎大学医学部産婦人科 ○今村 健仁、井上 統夫、北島 道夫、増崎 英明、
石丸 忠之

12 採卵時の麻酔と麻酔後管理の当院での看護の取り組み

セントマザー産婦人科医院 ○吉田 聖子、今村多英子、中野 知紘、丸田ちはる、
姫野 憲雄、田中 温、永吉 基、粟田松一郎、
田中威づみ

13 卵管における VEGF と sFlit-1 の産生に対する低酸素の作用

大分大学医学部産科婦人科 ○伊東 裕子、奈須 家栄、松本 治伸、河野 康志、
檜原 久司
セント・ルカ産婦人科 宇津宮隆史

14 Angiotensin II と胎盤アミノ酸輸送の検討

産業医科大学産婦人科 ○柴田 英治、吉田 耕治

第4群 [ARTI 卵、胚] 11:08~11:43

座長 福岡大学 井上 善仁

15 各種ホルモン剤における前処置後の胞状卵胞の変化についての検討

セントマザー産婦人科医院 ○田中 温、永吉 基、栗田松一郎、姫野 憲雄、
田中威づみ、吉村 沙織、中山 彰子

16 体外受精胚の8細胞期胚における各割球の染色体数の正常性についての検討・第2報

セントマザー産婦人科医院 ○竹本 洋一、田中 温、永吉 基、栗田松一郎、
姫野 憲雄、田中威づみ、鎌田 恵里、赤星 孝子、
馬原 千春

17 ヒト初期胚発生過程における卵細胞質内 Halo の出現様式に関する研究

竹内レディースクリニック附設不妊センター

○遊木 靖人、釘宮まりこ、福元由美子、永井由美子、
立石こずえ、小田原桂子、竹内 美穂、竹内 一浩

18 Biopsy により単離した多核割球の24時間連続観察と FISH 法による染色体分析

蔵本ウイメンズクリニック ○江頭 昭義、杉岡美智代、永渕恵美子、大津加奈子、
西垣 明実、拝郷 浩佑、福田貴美子、吉岡 尚美、
蔵本 武志

19 ヒト IVF における採卵時末梢血中ホルモン濃度と卵子発生能との関係

セントルカ産婦人科 ○佐藤千賀子、熊迫 陽子、大津 英子、宇津宮隆史
広島大学大学院生物圏科学 島田 昌之
醍醐渡辺クリニック 森 崇英

第5群 [ARTⅡ 成績] 11:43~12:11

座長 セントマザー産婦人科医院 田中 温

20 IVF-ET 治療成績と採卵数の関連性における年齢別検討

琉球大学付属病院産科婦人科学教室

○銘苺 桂子、照屋 陽子、神山 茂、金澤 浩二

21 子宮内腔エンドトキシン測定を試み及び IVF-ET との関連性に関する検討

琉球大学付属病院産科婦人科学教室

○神山 茂、銘苺 桂子、照屋 陽子

22 当院における Laser Assisted Hatching 成績の検討

ART 岡本ウーマンズクリニック

○秋吉 俊明、浜口 志穂、持下 麻子、庄司 博子、
小無田明美、岡本 純英

23 各種 luteal supprt 別の臨床成績の比較について

セントマザー産婦人科医院 ○永吉 基、田中 温、栗田松一郎、姫野 憲雄、
田中威づみ

第6群 [その他II 手術] 12:11~12:46

座長 鹿児島大学 沖 利通

24 当科における子宮内膜癒着による不妊患者の管理

鹿児島大学病院女性診療センター

○中江 光博、新谷 光央、井元有紀子、河村 俊彦、
儀保 晶子、新塘 奈央、時任 ゆり、貴島 佳子、
宇都 博文、山崎 英樹、沖 利通、堂地 勉

25 腹腔鏡下卵巢多孔術で自然排卵を認め、妊娠が成立した多嚢胞性卵巢症候群 (PCOS) の一例

九州大学病院産科婦人科 ○内田 聡子、近藤 裕子、梅崎 美奈、田中 義弘、
中村 博子、野崎 雅裕

26 AIH 施行後にみられた筋層内妊娠の1例

長崎市立市民病院産婦人科 ○松本亜由美、山口 真紀、三浦 成陽、佐藤 二葉、
藤下 晃
岡本ウーマンズクリニック 岡本 純英

27 急性骨髄性白血病治療後に発生した後天性膣閉鎖症の一例

福岡大学病院産婦人科 ○宮原 大輔、井上 善仁、堀内 新司、辻岡 寛、
瓦林達比古

28 小児の卵巢茎捻転に対する妊孕性温存を目的とした管理の注意点

鹿児島大学病院女性診療センター

○貴島 佳子、井元有紀子、新谷 光央、河村 俊彦、
儀保 晶子、新塘 奈央、時任 ゆり、宇都 博文、
神尾 真樹、中江 光博、山崎 英樹、沖 利通、
堂地 勉

第7群 [男性因子I] 13:30~13:51

座長 天神つじクリニック 辻 祐治

29 ヒト頭部円形精子の核成熟と卵活性化能および前核形成能の評価

蔵本ウイメンズクリニック ○拝郷 浩佑、江頭 昭義、杉岡美智代、永渕恵美子、
大津加奈子、西垣 明実、吉岡 尚美、蔵本 武志
県立広島大学生命環境学部 堀内 俊孝

30 顕微鏡下 TESE で目標とされる白くて太い精細管の病理学的解析

セントマザー産婦人科医院 ○栗田松一郎、田中 温、永吉 基、姫野 憲雄、
竹本 洋一、鋤田 恵里、赤星 孝子、馬原 千春、
羽太三保子、寺田 香織
神戸大学農学部動物多様性教室希少動物人工繁殖研究会事務局
楠 比呂志
弘前大学医学部解剖学第二講座
渡邊 誠二

31 顕微鏡下 TESE における迅速診断法の検討

セントマザー産婦人科医院 ○馬原 千春、田中 温、永吉 基、栗田松一郎、
姫野 憲雄、田中威づみ、竹本 洋一、鋤田 恵里、
赤星 孝子、羽太三保子
神戸大学農学部動物多様性教室希少動物人工繁殖研究会事務局
楠 比呂志

第8群 [男性因子Ⅱ] 13:51～14:12

座長 天神つじクリニック 辻 祐治

32 当院における「精巢上体精子採取」によるART治療10年間の検討

セントマザー産婦人科医院 ○栗田松一郎、田中 温、永吉 基、姫野 憲雄、
田中威づみ、竹本 洋一、鎌田 恵里、赤星 孝子、
馬原 千春

33 ヒト卵巢表層上皮細胞を用いたブタ円形精子細胞の体外成熟培養

熊本大学大学院産科学分野 ○名黒 籐志、本田 律生、飯田 直紀、大場 隆、
岡村 均
熊本大学大学院婦人科学分野 前田 知子、片瀨 秀隆

34 体外受精と精子DNA損傷率についての検討

セント・ルカ産婦人科 ○長木 美幸、那須 恵、佐藤千賀子、佐藤 晶子、
城戸 京子、平井 香里、大津 英子、熊迫 陽子、
宇津宮隆史

第9群 [ARTⅢ 単一ET] 14:12～14:40

座長 長崎市立市民病院 藤下 晃

35 適切な胚盤胞移植数についての検討

愛育会福田病院

○山本勢津子、榎木美智子、児玉美央子、松井 和夫、
東 憲次、福田 稔

36 Day3ET における過去6年間の多胎防止に対する取り組み

高木病院不妊センター

○山田 耕平、西山和加子、野見山真理、大野 恵里、
眞崎 暁子、江頭由佳子、有馬 薫、藤井麻友子、
小島加代子
佐賀大学医学部産婦人科 岩坂 剛

37 当院における Day3 選択的単一胚移植の臨床成績

高木病院不妊センター

○大野 恵里、山田 耕平、野見山真理、西山和加子、
眞崎 暁子、江頭由佳子、有馬 薫、藤井麻友子、
小島加代子
佐賀大学医学部産婦人科 岩坂 剛

38 ART における一卵性双胎の発生頻度に関する検討

蔵本ウイメンズクリニック

○吉岡 尚美、江頭 昭義、杉岡美智代、福田貴美子、
蔵本 武志

第10群 [ARTⅣ 凍結] 14:40～15:15

座長 熊本大学 本田 律生

39 再凍結胚移植の有効性に関する検討

セント・ルカ産婦人科 ○熊迫 陽子、那須 恵、佐藤千賀子、佐藤 晶子、
城戸 京子、平井 香里、大津 英子、長木 美幸、
宇津宮隆史
高度生殖医療技術研究所 荒木 康久

40 前核期における緩慢凍結の至適条件の検討

—sucrose 濃度、最終冷却温度の視点から—

蔵本ウイメンズクリニック ○大津加奈子、江頭 昭義、杉岡美智代、永淵恵美子、
西垣 明実、拝郷 浩佑、吉岡 尚美、蔵本 武志

41 Vitrification 法による分割期胚凍結融解移植の臨床成績

—初期胚2段階評価法を用いた選別—

IVF 詠田クリニック ○泊 博幸、高原 慶子、国武 克子、本庄 考、
詠田 由美

42 長期培養を行った凍結融解胚の臨床成績の検討

セントマザー産婦人科医院 ○姫野 憲雄、田中 温、永吉 基、栗田松一郎、
田中威づみ、竹本 洋一、鍛田 恵里、赤星 孝子、
馬原 千春
神戸大学農学部動物多様性教室希少動物人工繁殖研究会事務局
楠 比呂志

43 未受精卵の凍結方法の検討

セントマザー産婦人科医院 ○鍛田 恵里、田中 温、永吉 基、栗田松一郎、
姫野 憲雄、田中威づみ、竹本 洋一、赤星 孝子、
馬原 千春
神戸大学農学部動物多様性教室希少動物人工繁殖研究会事務局
楠 比呂志

第11群 [診断・検査I 遺伝子] 15:15～15:50

座長 琉球大学 神山 茂

44 PCR を用いた受精卵遺伝子診断における微量 DNA の混入について

国立病院機構西別府病院臨床研究部

○松田 貴雄、二宮ユミ子、上田 恭子

セントマザー産婦人科医院 鋤田 恵里、竹本 洋一、田中威づみ、田中 温

45 均衡型転座保因者の着床前診断

セントマザー産婦人科医院 ○鋤田 恵里、田中 温、永吉 基、粟田松一郎、

姫野 憲雄、田中威づみ、竹本 洋一

弘前大学医学部解剖学第二講座

渡邊 誠二

46 不妊症・習慣流産と高分子量アディポネクチン

ALBA OKINAWA CLINIC ○徳永 義光、徳永 季子、佐喜真 斉、賀数 清美、

金城 祐美

47 不育症患者における抗 PE 抗体陽性例での分娩歴についての検討

久留米大学産科婦人科学教室

○藤本 剛史、古賀 文敏、堀 大蔵、嘉村 敏治

48 抗リン脂質抗体陽性不育症の転帰についての検討

長崎大学医学部産婦人科 ○井上 統夫、池野屋美智子、北島 道夫、増崎 英明、

石丸 忠之

第12群 [診断・検査Ⅱ 癌とART] 15:50～16:32

座長 九州大学 野崎 雅裕

49 MPA 無効子宮体癌 I a 期に TCR および筋腫核出術後に妊娠した稀な症例

鹿児島大学病院女性診療センター

○河村 俊彦、井元有紀子、新谷 光央、儀保 晶子、
新塘 奈央、時任 ゆり、貴島 佳子、宇都 博文、
中江 光博、山崎 英樹、沖 利通、堂地 勉

50 異型子宮内膜増殖症を合併した多嚢胞性卵巣症候群の管理

鹿児島大学病院女性診療センター

○井元有紀子、新谷 光央、河村 俊彦、儀保 晶子、
新塘 奈央、時任 ゆり、貴島 佳子、宇都 博文、
中江 光博、辻 隆広、沖 利通、堂地 勉

51 乳癌術後症例における ART の経験

IVF 詠田クリニック

○本庄 考、泊 博幸、渡辺 久美、石田 弘美、
谷口加奈子、愛甲恵利子、詠田 由美

52 拳児希望例で卵胞期初期 FSH あるいは E2 基礎値が高値を呈する例の臨床的検討

長崎大学医学部産婦人科

○北島 道夫、カレク・ネワズ・カーン、井上 統夫、
平木 宏一、増崎 英明、石丸 忠之

53 閉塞性無精子症における超音波検査の有用性

天神つじクリニック

○成吉 昌一、辻 祐治

54 赤外分光法による X、Y 精子の識別法の開発

セントマザー産婦人科医院 ○田中威づみ、田中 温、永吉 基、粟田松一郎、
姫野 憲雄、竹本 洋一、鎌田 恵里

神戸大学農学部動物多様性教室希少動物人工繁殖研究会事務局

楠 比呂志

弘前大学医学部解剖学第二講座 渡邊 誠二

日本不妊学会九州支部長挨拶

熊本大学産科学分野 岡村 均

閉会の挨拶

会長 セント・ルカ産婦人科 セント・ルカ生殖医療研究所 宇津宮隆史

一 般 演 題

1. 遠赤外線治療患者の意識・治療効果調査

竹内レディースクリニック附設不妊センター

○立石こずえ、小田原桂子、永井由美子、
釘宮まりこ、遊木 靖人、福元由美子、
竹内 美穂、竹内 一浩

【目的】 当院では、補助療法の一環として人体と同一波長(8～15ミクロン)の遠赤外線を用いた温熱療法を取り入れている。今回、遠赤外線治療を行った患者の身体的・精神的変化についてどのような効果があったのか意識調査した。

【対象・方法】 ART 施行患者で遠赤外線治療を受けた患者60名を対象にアンケート調査を実施した。

【結果】 アンケート回収率は53%。身体的変化として冷え性改善が18名と最も多く、疲労感改善7名、不眠改善が6名、精神的変化に対し16名が有効と答え、リラックスできた・治療に対して前向きになれたが多かった。遠赤外線治療後ARTを施行した患者は12名、その内採卵個数、良好胚の増加、妊娠等の効果ありは6名、変化なし6名であった。より長期的に、実施した患者に改善が見られる傾向にあった。

【考察】 近年ストレスによるホルモン分泌の悪化も聞かれる。不妊治療によりストレスを感じる患者も多い。遠赤外線治療継続により、身体的改善が精神的改善へもつながっていると考察される。今回の調査では長期的に遠赤外線治療を受けた患者に妊娠例が多く見られた。

2. 不妊症患者における腹腔鏡検査前後の心理

セント・ルカ産婦人科

○河野 絢子、齊高 美穂、柴田 令子、
指山実千代、上野 桂子、宇津宮隆史

【目的】 不妊症患者における腹腔鏡検査前後の心理状態を調査、検討する。

【期間】 2005年3月4日～2006年1月13日

【対象】 腹腔鏡検査を受けた162名

【平均年齢】 32.6歳

【方法】 院長による腹腔鏡検査前の説明後と検査後の結果説明後にそれぞれ質問紙を配布、記入後回収した。

【結果】 何らかの仕事に従事しながら治療を継続している人が66%で「休みが取りにくかった」「休みは取れたが違う理由にした」と答えた人が65%にも上った。腹腔鏡検査前の不安で一番多く見られたのは「検査結果について」であり、検査後の不安について検査後説明の後では、「今後の治療について」が多く、中でも「体外受精について」不安を持つ人が多く見られた。検査前後において「今後どのくらいまで治療を進めようと思いますか?」と聞いたところ、検査前では「わからない」と答えた人が30%であったのに対し、検査後では18%に減少、「体外受精まで」が43%から59%に増加した。

【結論】 検査前では今後どのくらいまで治療を進めたいか「わからない」状態だったが、検査後の説明を聞くことで「体外受精まで」という夫婦の意思が明確になった事を考慮して考えると、患者の意思決定には十分な情報提供が必要であり、医療者と心理カウンセラーが連携し、必要に応じた心理的サポートが重要であると考えられる。

3. 女性不妊症患者と男性不妊症患者の 非配偶者間生殖補助医療に対する 意識の比較

セント・ルカ産婦人科

○恵良 郁絵、関 こずえ、松元恵利子、
原井 淳子、工藤 由香、柴田 令子、
指山実千代、上野 桂子、宇津宮隆史

【目的】我々は2003年に女性患者に対し、配偶子提供や代理出産についての意識調査を行った。今回は男性患者に配偶子提供と代理出産についての意識調査を行い、女性患者と男性患者の意識の違いを比較検討したので報告する。

【対象と方法】2004年6月から2005年5月に受診した男性患者388名に当院で作成した質問紙を配布した。回収率は89.9%であった。(平均年齢33.5歳、平均治療期間9.8カ月)

【結果・考察】前回の調査では、卵子提供・胚提供を受けたいと答えた女性患者はそれぞれ26.1%、16.2%であるのに対し、男性患者では各3.7%、2.0%であった。代理母が認められるべきであると答えた女性患者は60.9%であり、受けたいと答えた者は18.6%であったのに対し、男性患者では26.1%、9.9%であった。借り腹は認められるべきであると答えた女性患者は71.9%で、実際に受けたいと答えた者は32.0%であったのに対し、男性患者では42.4%、19.6%であった。前回の女性に対する調査と比較すると、今回の調査において、男性患者は、これらの治療に対し、消極的な態度を示していることがわかった。また、女性と比較すると男性の方が自分の血族や遺伝子に執着しているのではないかと考えられる。今後は男性患者と女性患者の意識の違いを認識した上で、情報提供や精神的ケアを行うことが必要であることがわかった。

4. 不妊治療で妊娠に至った患者への 質問紙調査 —男性因子の夫を持つ妻の気持ちについて—

セント・ルカ産婦人科

○赤嶺 佳枝、松元恵利子、指山実千代、
上野 桂子、宇津宮隆史

【目的】不妊の原因が夫にある妻の気持ちを知り、男性不妊カップルの今後のサポートに役立てる。

【対象】2003年7月8日から2005年12月28日までに妊娠に至り、他の分娩施設へ紹介となった女性患者582名。

【方法】最終診察日に当院作成の質問紙を手渡し郵送にて回収した(回収数365名 回収率63%)。

【結果】質問紙による回答では、不妊の原因が男性因子と答えた妻は59名(16%)と低い結果であった。その内訳は、男性因子のみの群が24名(41%)、男性因子と女性因子の群が35名(59%)であり、その内無精子症とRESA(手術で精子採取)した重症男性因子群は6名(10%)であった。「男性不妊がわかった時、どう思いましたか」の質問に、重症男性因子群では「夫の気持ちを思うと辛かった」など夫を思いやる気持ちを持つ者が80%以上と多く、「離婚を考えた」等の否定的な意見は少なかった。「ドネーション(精子提供)を考えましたか」の質問では、「考えた」という回答が2%であり夫の子供を望む妻の強い気持ちが伺えた。

【考察】妊娠した患者群では必ずしも「男性因子が夫婦関係に否定的な影響を与える」訳ではなく、事実を受け止め前向きに治療に取り組む姿勢が伺えた。この結果を踏まえ男性因子を持つ患者に気持ちの持ち方について、一層のサポートを心掛けたい。又今後は、不妊原因が夫にある妊娠に至っていない患者の声も検討していく。

5. 治療を休む事への抵抗感が強い女性不妊患者への臨床心理士による支援

蔵本ウイメンズクリニック

○伊藤 弥生、福田貴美子、蔵本 武志

【目的】 女性不妊患者はストレスから不安・抑うつ等を示しやすいが、休養が必要な患者ほど治療を休む事へ抵抗しがちである。本発表では臨床心理士による支援について検討する。

【事例】 A氏：30代後半、続発性の長期不妊でART適応。主訴「死産後の発作(耳鳴り・目眩・冷や汗)の再発が不安」。不調ながら40歳までに絶対に妊娠をと焦る。発作は死産の『喪の作業』の未完が問題で、妊娠への焦りは加齢への過剰な不安に由来すると思われたため、臨床心理士は気持ちを受容の上、心理教育。以後焦りや不安定な様子は見られず2度目のARTで妊娠し40代で出産。B氏：30代後半、男性因子でICSI適応。ARTで挙児。兄弟児を望み治療再開するも流産等で疲弊。主訴「治療を長く続けてきたがこの先どうするかいろんな事で混乱」。抑うつ状態顕著で休む事を勧めるも「何をしたらいいかわからなくなり焦る」と抵抗。この時点ではカウンセリング継続の促しに留めた。再来時は不安は減じていたが、うつの辛さと新たな生き方の悩みを訴える。(適切に考えるためにもまず心身の回復を)と助言すると今度は素直に同意。半年間不妊治療を休み心身の回復に努められた。

【考察】 女性不妊患者は加齢による卵巣機能の低下を怖れて治療を休む事へ抵抗しやすく、この心理へ配慮した支援が必要である。また、治療を離れる事への不安が極めて高い場合には休む気になる事への支援が肝要だろう。

6. 40歳以上の不妊症患者を対象としたサポート・グループの取り組みーグループプロセスと有用性についてー

セント・ルカ産婦人科

○上野 桂子、二宮 睦、松元恵利子、門屋 英子、原井 淳子、指山実千代、宇津宮隆史

【目的】 40歳代の生殖補助医療を受けている治療困難な不妊症患者を対象とするサポート・グループを作り、長期間継続したのでそのグループプロセスと有用性について検討した。

【対象】 当院で2001年11月までに体外受精を受けた40歳以上の挙児希望患者25名に声をかけた結果、第1回目の参加者は8名、開催期間中少なくとも1度でも参加した者は24名であった。

【方法】 2001年11月～2005年7月まで1～2ヵ月に1回土曜日の午後、当院にて約2時間程度看護師と心理士を交えて自由な話し合い形式で実施した。このサポート・グループは基本的にはクローズド形式で行った。

【結果・考察】 グループ開始時は6ヵ月(6回)開催予定であったが、参加者の希望によりその後も継続して開催した。1回～15回は1ヵ月に1回、その後は2ヵ月に1回開催し、20回～27回は第2期のサポート・グループと合同で開催した。参加者の平均出席回数は5.6回(1～26)、1回の平均参加人数は5.0人(2～10)であった。全ての参加者がグループから離れるまで3年8ヵ月、全27回継続した。このサポート・グループに参加することにより参加者同士に仲間意識が芽生え、互いに支え合いながら治療に臨む姿が見られた。また、回を重ねるに従い、話の内容は深まった。グループ参加がその後の状況に応じた参加者自らの選択や新たな生活に踏み出す一助となったと思われる。

7. 不妊治療終結に対する患者の意識調査

セント・ルカ産婦人科

○門屋 英子、二宮 睦、松元恵利子、
篠田多加子、原井 淳子、指山実千代、
上野 桂子、宇津宮隆史

【目的】 治療終結の決断を余儀なくされた患者サポートのあり方を検討するため、治療終結に関する意識調査を行った。

【対象及び方法】 2005年7月から10月の間に来院した女性患者を対象に治療終結に関する質問紙調査を行った。対象者106人。有効回答率90.6%。(今回二人目不妊は除いた)平均年齢35.3±5.0歳。

【結果】 全体の32%の患者が治療終結を考えたことがあると回答し、そのうち40歳以上では52%存在した。治療終結を考えた患者のうち82%がART中の患者であった。終結を考えた理由は、全体では『経済的』『治療に疲れた』『年齢』の順に多く、40歳未満の患者では『経済的』『精神的に不安定』が、40歳以上の患者では『年齢』『治療に疲れた』の順に多かった。終結を考えたときに望むことは『夫婦で納得するまで話し合いたい』が68%であった。

【考察】 治療終結を考える患者は40歳以上、またART中の患者に多くみられることが確認された。年齢や治療内容が進むにつれ、患者は追い詰められた状況にあり、治療終結を考える傾向にあると考えられる。終結を考える際に望んだ内容から夫の存在は大きく、重要なキーマンであることが窺え、治療中から夫婦で取り組んでいくことが重要であると思われる。また、終結を考える理由に『治療に疲れた』『精神的に不安定』などが挙げられ、系統的な心理的サポートの必要性も示唆された。

8. 不妊治療費助成金制度に関する意識調査

竹内レディースクリニック附設不妊センター

○小田原佳子、永井由美子、立石こずえ、
釘宮まりこ、遊木 靖人、福元由美子、
竹内 美穂、竹内 一浩

【目的】 高度生殖医療を受けるにあたり、経済的負担は大きい。今回我々は平成16年8月より行われている「不妊治療費助成金制度」に関し当院で治療を受けた患者の利用状況や不安なく申請を行っているのか、また申請していない方の原因・心理も含めて調査し、今後の社会に求める患者の心理を検討する。

【方法】 平成17年度1月～10月までにARTを受けた患者で協力して頂ける109名にアンケート調査を実施した。

【結果】 助成金を受けた方は56名。手続きを行う上で不安があった方が34%。殆どが「治療をしていることを知られる不安」であった。手続き上での不安は、施設の対応や環境での不安であった。申請していない方は51名。30名が収入超過にて申請出来ない方で、条件が整えば申請したい方が43名であった。金額や貰える回数に関しては殆どの方が不安でせめて回数を増やして欲しいとの要望が多かった。また、少子化問題での対策として保険適応を希望する意見が多く聞かれた。

【考察】 一回の治療費に関しては納得していても、回数を重ねてくると経済的負担が大きく諦めないといけない立場に追い込まれる方も少なくない。せめて排卵誘発剤の保険適応を望む声も聞かれた。助成金制度があっても適応できない方が多く、不満も聞かれる状況であれば、制度を見直す必要性を働きかける必要があると考えられた。

9. 漢方療法は原因不明の女性不妊に有効か？

鹿児島大学病院女性診療センター

○沖 利通、新谷 光央、井元有紀子、
河村 俊彦、儀保 晶子、新塘 奈央、
時任 ゆり、貴島 佳子、宇都 博文、
中江 光博、山崎 英樹、堂地 勉

【目的】 従来から、不妊治療に漢方療法を応用することは多い。治療にも検査にもエビデンスが求められる時代に、漢方療法の効果を西洋医学の尺度でエビデンスを証明することは困難である。今回、当センターで行ってきた不妊症患者に対する漢方療法を後方視的に検討し、どのような症例を漢方療法の対象とし、どのような方剤を処方するべきかを検討した。

【方法】 原因不明の不妊症患者8名に漢方療法を行った。証の所見を、投与前、投与後1ヶ月、投与後3ヶ月、妊娠時に記録し、妊娠例と非妊娠例の違いを検討した。

【成績】 妊娠例は、方剤と患者の証の一致率が高く、投与後1～2ヶ月で証が改善し、早期に妊娠していることが明らかになった。一方、非妊娠例では、方剤の証との一致率が低く、投与開始後の証の改善がみられなかった。

【結論】 典型的証を示す原因不明不妊に対する漢方療法は有効であり、特に1～2ヶ月の早期に証の改善がみられた場合効果が高いことが明らかになった。今後、症例を重ねさらなる検討を行いたい。

10. 肥満に対する食事および運動療法の効果について

セントマザー産婦人科医院

○宮本 知佳、田中 温、永吉 基、
粟田松一郎、姫野 憲雄、田中威づみ

【目的】 肥満を合併した排卵障害の治療は、困難に伴うことが多い。今回我々は、ホルモン治療を行う前に、肥満患者に対し食事および運動療法を施行し、臨床上有用な結果を得たので報告する。

【方法】 BMI26以上の不妊症治療患者を対象とし、1年間 follow up した。食事療法としては、1. カロリーを計算する習慣をつける。2. 朝・昼食を中心とし、夕食の炭水化物の量を20～30%減少。食品が偏らないように主食、主菜、副菜、汁物を食べる。3. 夕食後就寝まで4～5時間あけ、何も食べない。4. 毎日起床時、体重測定し記録する。運動療法は、個人の好みに合わせ、ウォーキング、筋トレ、ヨガ、エアロビックス(特に就寝前)のメニューを作った。1ヶ月に1回来院し、体重、体脂肪率の測定。排卵状態をチェックした。BMIの減少が3以上、3～1.5、1.4～1を著効、有効、やや有効と判定した。

【結果】 1. BMIの減少の平均値は、1.94(0～9.5)、3例でBMIの増加が認められた(0.3～3.1)。2. 著効、有効、やや有効、効果なしの割合は、17.5%(7/40)、35.0%(14/40)、12.5%(5/40)、35.0%(14/40)であった。3. 著効群、有効群21例中6例(28.6%)で月経が正常化し、2例で自然妊娠した。

【結果】 肥満を伴う排卵障害の症例に対し、正常体重に戻す食事・運動療法は、非常に有用であった。